

先日、ものすごく久しぶりに大野修平先生の「シャンソンのベル・エポック」講座を聴講させていただいた。今は教室員ではないのに、未だに皆様が教室の仲間として私を覚えて下さるのは「会報 Ça va?」に掲載し続けた文章のお蔭だろう。そして教室開設当初からずっとクラスの世話を下さっている太田光弘氏・亀井繁男氏(故人)・安井高明氏のお蔭だろう。家族であれ、会社であれ、様々な組織・団体において、中心となって世話をする人間がいるから、人々は個々人の事情を乗り越えて長くつながることができる。離れても同じ土壌で再会することが出来る。そして気取らない先生のもとに、気取ることの嫌いな仲間たちが集まり、講座終了後には実にフランス的で人間的な対話が生まれる懇親の場が待っている。

さて、聴講したその日の講座では、エディット・ピアフ、セルジュ・ゲンズブール、そして先ごろ亡くなったジョルジュ・ムスタキが採り上げられた。またフランス語の「S」の読み方が濁音か否かの区別法や、詩の中にある言葉遊びの解説があり、夏休み前スペシャルとして、ムスタキのCDに合わせて一曲歌うために、先生が読んだ後について発音し、1度曲を聴き、次に皆で歌った。私は聴いたことのない歌だったが、覚えやすい曲だったので何とか歌えた。充実した1時間半だった。

そして講座の中で採り上げられた『LA LIGNE DROITE』は、直訳すれば「直線」だが「いつか戻りくる人」という邦題がついている。これはジョルジュ・ムスタキが作詞・作曲した歌で、バルバラもこの詩に違った曲を付けている。その歌のCDを聴いたが、二人の歌詞は所々違った。そして私は思った。ムスタキの曲は上から包み込むように弧を描いて降りてきて、バルバラの曲は下からすくい上げるように弧を描いて昇って行くようだ。感覚的に例えるなら、ムスタキはメジャーで、バルバラはマイナーな感じ。それは彼らの他の曲にも現れている特徴で、そこから彼らの個性が読み取れる。文章、詩、楽曲、絵画、彫刻、あらゆる表現物はその人となりを表す。

そして次に『EN MÉDITERRANÉE』という歌が採り上げられた。邦題「内海にて」とあったが「MÉDITERRANÉE」の意味は「地中海」である。そして地中海はジブラルタル海峡でしか外海につながらない「内海」である。「内海」とは本来静かな海である。しかしその静寂は戦争によって破られた。ヨーロッパの歴史は侵略戦争の繰り返いで、この歌もまたその内容を含んでいるが、そういった意味でムスタキが歌で訴えたことと、バルバラが歌で将来に望んだ平和の意識が共鳴し合う。この詩の冒頭の「黒い目の子供たち」は私にバルバラの『GOTTINGEN (ゲッティンゲン)』の中にある「子供たちの金髪」を連想させた。そしてアレキサンドリアや小国が集まったイタリアも思い出させた。因みにイタリアでは金髪・青い目はヴァイキングの子孫と言われている。統治者が変わるたびに様相が変わる国で人々の血が混じり合う。それと同様にベル・エポック期のシャンソン・フランセーズではフランスの戦いの歴史も踏まえて考えなければならない。それはおそらく島国である日本では遠い感覚なのだろう。限られたスペースの中に収められた対訳詩の中には現れていない風景だ。中庸を美とする日本の表現はオブラートに包まれているので、原詩に触れることは必要だと思う。「秋を恐れない美しい夏」と歌われた「フランスの中の異国」と言われる地中海沿岸。そこに向けられたムスタキとバルバラの視線が歌の中には刻まれている。(2013.8.11)